

第五十回中央教化研究会議 基調報告

ブツダと私たち

——戦後の仏教、法華経のめざすもの——

三 原 正 資

みなさま、こんにちは。本日は、中央教研開催五〇回を記念して、「ブツダと私たち」というテーマで、シンポジウムを開催するに至りました。

〔仏教グローバル化の時代〕

私事になりますが、五〇年ほど前に、感銘を受けた本の一つに、中村元氏（一九二一—一九九九）の『東洋人の思惟方法』（『中村元選集』第一〜四巻 一九六一—一九六二）があります。仏教が展開したインド・中国・日本・チベットで、各々の異なった思惟方法によって、仏教が異なる姿を示したことに、私は深い印象を受けました。今日、独自の姿をもつマインドフルネスということばで知られるアメリカ仏教が日本に上陸しつつあります。私は、二〇一〇年、サンフランシスコのゴールデンゲートブリッジを渡って曹洞宗禅センターの一つ、グリーン・ガルチ・ファームを訪れ、そのち、サンノゼの妙覚寺別院に参り、松田龍紹師に案内され、本堂に入りました。ご本尊は江戸初期の作といわれる一塔兩尊です。日本を遠く離れたアメリカで四〇〇年前のご本尊を仰ぎ、宗祖が三秘を明された『報恩抄』の一節を唱えました。

一 閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。(定遺二二四八頁)

このような仏教グローバル化の時代に、ブツダ観を論じ、現在、私たちが置かれた状況を明らかにしたいと思ひ、このシンポジウムを企画いたしました。

〔人間釈尊・人間日蓮〕

私がつとも感銘を受けたブツダに関わる本の一冊は、ノーベル文学賞を受賞したドイツの小説家ヘルマン・ヘッセ(一八七七一―一九六二)が第一次大戦後に出版した『シッタールタ』です。一九六五年頃、手塚富雄訳(当時は角川文庫、現在、岩波文庫所収)で読みました。

シッタールタはゴータマ・ブツダの幼名です。ブツダの幼名を名前とした人物を主人公にして、ヘッセは、彼のブツダ観を語りました。シッタールタとゴータマ・ブツダの出会いのシーンを次のように叙述しています。

彼は注意深く、ゴータマの頭を、その肩を、足を、静かに垂れている手を見つめた。その手の指の一つ一つの関節が教えであり、真理を語り、呼吸し、におわせ、輝やかせている、と思われた。この人、この仏陀は小指の動きに至るまで真実だった。この人は神聖だった。シッタールタは、この人ほどひとりの人をあがめたこと、愛したことはなかった。(『シッタールタ』新潮文庫 一九七二)

私は書齋に置いてあるガンダーラ仏の「仏手」を見ると、『シッタールタ』のこの一節を思い浮かべます。若いときの感動は、私のブツダ観に大きな影響を与えました。ところで、テイク・ナット・ハン師(一九二六―)による

『ブツダ Old Path White Clouds』（春秋社 二〇〇八）を読むと、『シッタールタ』と共通するものを感じ、現代の人々のためのブツダの物語と思いました。

中村元氏や増谷文雄氏のブツダの伝記にも感銘を受け共感しました。

たとえば、中村元氏の『ゴータマ・ブツダ』では、初転法輪の様子を描いた次のような箇所です。

世尊はこのように説かれた。五人の修行僧の集いはこころ喜び、世尊の所説を喜んで受けた。そしてこの〈決まりのことば〉が述べられたときに、集うた五人の修行僧は執着なく、もろもろの煩惱から心が解脱した。

そこでその時、世に六人の〈尊敬さるべき人〉がいることとなった。

そして、中村氏は次のコメントを付け加えます。

最後の一文がサンスクリット文（『四衆経』）や相当チベット文では、

『そのとき実に世に五人の尊敬さるべき人（阿羅漢）あり、世尊を第六とする。』

となっている。仏教の最初期においては、ゴータマ・ブツダも「尊敬さるべき人」の一人であり、他の修行者たちとこの点は区別されることがなかった。（パーリ文は古形を伝えている。）ところが後世になると、釈尊を他の者どもと同列に扱ってはならないと考えて、ついにこのように区別することとなったのである。（中村元選集第一一巻 春秋社 一九六九）

増谷文雄氏は『仏陀』の巻頭で、〈人間像としての釈尊〉の小見出しのもと、述べます。

この人を見よとわたしはいう。なんとすれば、ここにわたしどもが考えるかぎりの、最高の人間像があるからである。

ついで、〈これまでの仏伝〉の小見出しのもとで、述べています。

では、わたしどもは、いかにしてこの人に対面し、この人を見ることができようか。そのことは、残念ながら、けっして容易なことではないのである。なんとすれば、この人にいたる道は、はなはだしく歪められ、この人の真の姿は、いちじるしくわたしどもから遠ざけられているからである。『仏陀』角川選書 一九六九)

天皇が人間宣言をした、いわば神が人になった戦後のこの時期、ブツダは人間釈尊として描かれ、人々に受け容れられていたのです。

事情は宗祖の伝記においても同様です。高木豊先生（一九二八—一九九九）の『日蓮 その行動と思想』（評論社一九七〇）は、日蓮という歴史上の人物像を描いたものであり、立正大学の授業で先生の訶咳に接し大きな影響を受けました。他に印象的な伝記は、一度お目にかかったことがある、『日蓮の思想と鎌倉仏教』（富山房 一九六五）の著者で金沢大学教授であった戸頃重基氏（一九一一—一九七七）の『日蓮という人——その虚像と実像』（至誠堂新書 一九六六）で、〈はしがき〉で述べています。

博多の海をにらむ銅像で象徴されているような国粹主義的な英雄日蓮、立正大師号をもらって、センダラ（漁夫）の子から立身出世した官製日蓮、綿帽子を頭にのせ、紫衣金らんの袈裟もおごそかに、お厨子ずしの奥に鎮座まし

ます宗祖日蓮、おまじないや厄除けでありがたがられる巷間のカリスマの日蓮、そういう日蓮を書くためならば、なにもわたしの筆を労するまでもないことである。わたしがここで書こうとしている日蓮は、身延の山で冷えん^んで腹くだしをしたり、予言がはずれて、しょげこんでしまったり、生国安房のお国自慢^{あま}をしたり、天下の高僧たちを由比ガ浜で斬ってしまえ、と怒りをぶちまけたりする人間日蓮である。

戸頃氏は昭和四〇年（一九六五）頃、当時の身延山布教部長岩間湛良師（一九〇八―二〇〇一）に声をかけられたとうかがっていますが、身延山短大で講演し、その祖書第一主義と室住一妙先生（一九〇四―一九八三）の祖廟第一主義との論戦をなつかしく思い出します。

〔釈迦脱仏・日蓮本仏論〕

さて、戦後のこのような状況の中で、私たちは日蓮正宗創価学会（当時）と向き合っていました。

創価学会の歴史を振り返ります。

一九三〇年（昭和五年）、初代・牧口常三郎（一八七一―一九四四）が創価教育学会を設立。一九四六年、二代・戸田城聖（一九〇〇―一九五八）は創価学会と改称し、一九五一年、二代会長に就任、「折伏大行進」と呼ばれる布教活動を始めました。政治活動に進出したのは一九五五年、東京都議会、地方議会で当選をはたしました。

このごろは「神々のラッシュアワー」と呼ばれるように新宗教の活動は注目を集めました。

一九六〇年、池田大作（一九二八―）が三代会長に就任する。一九六一年に公明政治連盟を結成、六四年には公明党を結党し、六七年には衆議院にも進出しました。政界へ進出した目的は国立戒壇を建立するためだった。ところが一九七〇年、言論出版弾圧事件が起こり、その後創価学会は国立戒壇を否定し、政教分離の方針を明らかにした。

この路線転換を批判したのが、一九四二年に結成された創価学会と同様の日蓮正宗の信徒団体、妙信講である。ところが、一九七四年、日蓮正宗は創価学会の主張を認め、妙信講を破門した。一九八二年、妙信講は日蓮正宗顕正会と改称、さらに九六年、富士大石寺顕正会と名称を変更、翌年、『日蓮大聖人に帰依しなければ日本は必ず亡ぶ』を発刊しました。

一九六〇年代に人間ゴータマ・ブツダ、人間日蓮が語られていたとき、一方で創価学会はいわゆる釈迦脱仏・日蓮本仏論を主張したのです。

『折伏教典』（創価学会 昭和二六年初版 昭和三三年再版）第五章 末法の民衆と日蓮大聖人との関係、第一節 釈迦と我々が関係なき理由）の中で、次のように述べています。

仏教上、仏と称せられる方は数限りなくおられるが、その数限りない仏は、時と処と衆生に応じて、一人一人御出現になることになつてゐる。(略)「御出現」に當つてその時の衆生を利益するのに力のある「法」をもつておいでになる。(略)今日末法の法は釈迦仏の時ではないのである。釈迦の法はもう死んだ法で何の利益もないのである。

(略)

されば釈迦の仏法は法華經二十八品であり、日蓮大聖人の仏法は「南無妙法蓮華經」の七文字の法華經であられる。この七文字の法華經の行者は末法の教主であらせられることは疑いない。日蓮大聖人が末法の御本仏であらせられる……

そして、その「御証文」として、開目抄の「三大誓願」と観心本尊抄の「種脱相對」を挙げています。

『折伏教典』には「大通智勝仏は（略）三千年前の印度では紙屑みたいなボロ仏である」という表現がありますが、この、いわゆる釈迦脱仏ということばのもつイメージは、日蓮聖人とその教えのイメージを著しく損なつたと思ひます。

一九六四年に出版された『創価学会の教学的批判』（中濃教篤編 東成出版社）の中で高木幹太氏（東洋英和女子学院短大講師・当時）は、キリスト教の立場から、次のように批判しています。

創価学会が、日蓮を末法の時にあらわれた本仏として信ずる問題について触れてみたい。周知のごとく法華經には久遠実成の仏が存在して、それを信ずるものは救われ功德を得るということが書かれており、日蓮正宗・創価学会では日蓮は普通の人間ではなくその永遠不滅、久遠実成の仏であるのだと主張する（略）。これは永遠のロゴスが肉体となつたそれがイエスである（ヨハネ伝・一・十四）というキリスト教の主張とよく似ていると云えよう。だがキリスト教においてイエスをそのように信ずる場合には、人間の宗教的・実存的な領域でのある普遍的な意味がそこにあるわけであるが、創価学会の教義にはそれを見ることができないのである。（略）法華經については現代の学者によって釈迦が説いたものではなく、彼の滅後数百年を経て紀元一世紀ごろから数代にわたつて作られたものだと云われているわけだが、それとは関係なく、久遠実成の仏の存在ということについては宗教的・実存在的な意味があると思われる。だが、日蓮が自己をその仏であると云つたといひゆる「御遺文」だけを論拠にして「日蓮本仏論」をとなえることには宗教的・実存的な領域で人を納得させるに足る普遍性は無いと云うべきである。これでは、ひどく云えば誇大妄想狂の患者がそう主張した場合にもそのように信じなければならなくなつてしまう。

五〇年ほど前にこの指摘を読み、私はあたかも日蓮聖人の教義は「普遍的な意味」がなく、「誇大妄想狂」者の発

言である、と批判されたかのような気持ちになりました。

さて、このことは、祖師信仰をどう考えるかということにもなります。

一九六九年に角川書店から出版された『仏教の思想⑫』（現在、角川ソフィア文庫）では、梅原猛氏と紀野一義氏が「人間神化の時代」と題して、次のように指摘しています。

梅原 私はこの前、身延に行つて、御開帳を見てきたのですが、大きな日蓮の像がワーツと出てくる。これを見たときに、やっぱり人間神化の時代が鎌倉時代だ。つまりそれまで仏さまという人間以外のものを拝んでいたのに、人間を拜むようになった。いわゆる人間が神になった時代だと思つたのです。親鸞でも道元でもそういう傾向があつて、浄土真宗では祖師堂のほうが阿彌陀堂の前にあつたりする。そういう一種のルネッサンスを、あの御開帳を見て感じたのですけどね。

紀野（略）やっぱり仏法というものは、仏対人間の問題であつて、人間対人間の問題じゃないと思ひますよ。祖師を通して仏を見るというならそれでもいいですけどね。禅宗でも師家は非常に大事にしますけれども、お釈迦さまとか仏をほつたらかして、お師家さま第一というのでは、これは仏法じゃない。そういう点は鎌倉仏教はたしかに危険なものを持つていると思ひますよ。

〔生命（いのち）としての仏陀論〕

次に創価学会の「生命論」に着目します。

『折伏教典』（昭和三三年再版）には、この生命論は「大白蓮華」第一号（昭和二四）に戸田会長が掲載したものと
いう註がつけられ、出てきます。

（昭和十八年の夏弾圧されて、爾來二カ年の）冷い拘置所に、罪なくとらわれて、わびしいその日を送っているうちに、思索は思索を呼んで、終には人生の根本問題であり、しかも難解きわまる問題たる「生命の本質」に、つき当たったのである。「生命とは何か」「この世だけの存在であるのか」「それとも永久に続くのか」これこそ永遠の謎であり、しかも、古来の聖人賢人と称せられる人々は、各人各様に、この問題の解決を説いてきた。（略）

そこで私はひたすらに、法華經と日蓮大聖人の御書を拝読した。そして法華經の不思議な句に出合い、これを身をもって読み切りたいと念願して、大聖人の教えのままにお題目を唱えぬいていた。唱題の数が二百万遍になんとなんとする時に、私は非常に不思議なことにつき当り、未だかつて、はかり知り得なかつた境地が眼前に展開した。（略）かかる体験から私は今、法華經の生命觀に立つて、生命の本質について述べたいと思うのである。

そして、結論して次のように述べています。

このように現在生存する我らは死という条件によって大宇宙の生命へとけこみ、空の状態において業を感じつつ変化して、何らかの機縁によって又生命体として発現する、このように死しては生れ生れては死し、永遠に連続するが生命の本質である。

『折伏教典』（第三章 一念三千の法門）では、さらに次のように述べます。

日常生活やあらゆる働きの根本となるものが我々の生命であるが、仏教ではこの生命の実相——本質を一念三千で説き明している。（略）一瞬の生命にこの三千を具していると説くのが一念三千である。

我々の生命は永遠であつて滅びることがないというのは釈迦の覚りであり生命の実相である。我々が信心し折伏をするのはこの永遠の生命を我が身に認識しゆるがぬ幸福感を証得することが目的であり、この生命を確立して強い生命力の働きを生活に実践することで、これを顕現することのできる状態を仏というのである。

日蓮大聖人は末法の一切衆生のために、この一念三千の御当体としての南無妙法蓮華經の大御本尊を御建立遊ばされた。我々一切衆生は大御本尊を信じてお題目を唱え修行を励むならば即身成仏する、これを事行の一念三千という。

〈第十章 日蓮正宗の本尊〉には、

妙法蓮華經は宇宙一切の森羅万象を包含する一大活動であり、一生の最高法則である。しかも御本仏日蓮大聖人の御生命のみちみちた大御本尊を対境絶とする生活は、(略)利益も大であるが、これにそむく嚴罰も明らかであり、背けば大阿鼻地獄へ墮する者となる。

ところで一九七〇年現代宗教研究所発行の『所報』第四号の対談では、この生命論について、佐木秋夫氏が創価学会の生命論を

す| 宇宙の大生命のそのものの当体であるところの大御本尊さまを拝めば、そういった宿命が転換されるというので

とまとめ、それを承けて、生命論について意見が交わされる。その部分を紹介しておきます。

〔茂田井〕（略）きわめて形而上の生命論ならば、これは一念三千色心因果といったような、そういうものとなりがちがあると思うのです。だから学会でいうもの必ずしもそうでないと思うのですけれども、私共の立場では生命論というものはないですね。

〔丸山〕ただ法華経主義といえますか日蓮を媒介としない法華経主義思想の中には生命論的なものが若干、例えば紀野さんあたりには見えるものがありますね。法華経理解といえますか、それから宮沢賢治あたりのものの中に、そういう傾向のものがあるかも知れないと僕は別にここにあると指摘は出来ないのですけれども。

〔茂田井〕そうですね、日蓮を媒介としないでいきなり法華経へ行けばあるいは出て来るかも知れませんね。

〔佐木〕紀野さんは創価学会が盛んになってから、そういうことをいいたのでしょうか。それとも前からですか。

〔丸山〕さあそここのところはわからないのですけれど、やや、そこをおもねっているとところがあるのじゃないのですか。

〔木村〕法華経の解釈の上で島地先生だとか、天台の方での法華経の一般的な口あたりのいいというか、通俗的なものをお書きになるそういうものはなる程、そういう考え方があったような気がするのです。私がよんだのでは境野黄洋氏のものの中にはありますね。

〔佐木〕私はね、正当な仏教の方では、たしかにこれは一つの譬喩で使いやすいものでしょうが、その使いやすいものをあえて使わないという理由があったのじゃないかと思うのですが。（略）これはインドのパラモン思想の部類と思うのです。それから大我という考え方、マチカルな宇宙にびまんする何かがあってですね。こういった点

だとうっかり生命という言葉をつかうと下（外）道主義におちる恐れがあるということを仏教の正統派は考えたのではなからうか。それをあえて戸田さんあたりは使い出したのじゃないかという事なのですがどうですか。

〔茂田井〕 だと思いませんな。（略）

茂田井教亨（一九〇四―二〇〇〇）

丸山照雄（一九三二―二〇一一）

佐木秋夫（一九〇六―一九八八）

木村勝行（一九三七―）

生命論については、この後も意見が交わされます。

『所報』四号の〈対談〉でふれられた紀野一義氏（一九二二―二〇一三）の生命論——いのち——に触れます。

私自身、一九六〇年代半ば頃から、七〇年代初めにかけて、紀野氏の著作を読み、講演を拝聴しました。この頃、紀野氏は池上本門寺やこの宗務院旧庁舎講堂で定期的に講演し、『法華経の風光』全五巻（水書房 一九七六）等としてまとめました。

『いのち——永遠なるものを求めて——』（読売新聞社 一九七〇）で、氏は「いのち」を次のように説明しています。

「いのち」、このふかく大きなものは、実は、ことばなどでは説明のできないものであるが、仏教の昔からのいいならわしにしたがって、「いのち」または「こころ」と呼ぶことにしよう。

この大きな根源的な力は、また、「仏心」とも、「根源的ないのち」とも、「仏」とも呼ばれている。法華經に「久遠実成の仏」(永遠の昔から実存しつづけている仏) というのもこれである。われわれはこの「いのち」によって、この世に生を享け、「仏性」をそなえたのである。

『法華經の風光 第四卷 いのち限りなく』(一九七七)では、次のように述べている。

弁榮尊者の使った「一大心霊」という語でも、何か靈魂のようなものを連想する人が多いようである。「一大心霊」「一大観念」というものは、「永遠の生命」「法身の仏」「久遠実成の仏」「大いなるいのちとしての仏」を意味するのであり、その働きからいえば「妙法」そのものなのである。

仏が常に此に在って法を説いているのであるから、実にこの土こそは浄土である。(略) 日蓮聖人の(念仏批判の)基本原則の根柢になったのが、この「如来寿量品」なのであった。

『仏教の思想⑫ 永遠のいのち(日蓮)』(紀野一義・梅原猛 角川書店 一九六九)では、唱題成仏を次のように述べています。

「仏」とは「永遠なるものそのもの」である。わたしの中に永遠なるものがあらわれる。わたしと永遠なるものとがひとつになる。わたしが、わたしでありながら、永遠なるものそのものになる。それを「成仏」というのである。

ところで、この本の中に、私は「聖教新聞」（一九六九・一〇・一六）〈羅針盤〉のスクラップをはさんでいた。

▼最近『仏教の思想』⑫——永遠のいのち〈日蓮〉という本が出版された。（略）

▼著者の一人、紀野一義なる学者は、法然にも、親鸞にも、禅にも、念仏にもひかれるというよろず屋。それで日蓮大聖人の一生を描こうというのだからお笑いだ。（略）

▼それにしても、仏法に対する無知ぶりは気の毒なほどはなはだしい。竜の口における発迹顕本や示同凡夫としてのお振る舞いを「心理的転換」だとか「矛盾」だとかいうにいたってはよほど粗雑な頭の持ち主としかいいようがない。（略）

このように、創価学会は、紀野氏を「よろず屋」として批判していた。

さて、この「いのち」——生命論——は、現在、どのように考えられているのでしょうか。

『無葬社会』（鶴飼秀徳 日経BP社 二〇一六）の中で、佐々木閑氏（花園大学教授）は日本仏教の〈「こころ教」化〉として、次のように発言しています。

「「こころ教」のキャッチフレーズにはキーワードがあります。それは「心」と「命」です。動詞では「生きる」です。この三つのキーワードで、どの宗教もキャッチフレーズを語るようになっていきます。たとえばある仏教団体のキャッチフレーズは「今、いのちがあなたを生きている」です。一体、何を言っているのか分かる人がどれほどいますか。（略）つまり、各宗派が持っている個性はもうなくなっているということです。」

『二〇〇分de名著 ガンディー「獄中からの手紙」』NHK出版 二〇一七）では、中島岳志氏（東京工業大学教授）は次のように述べます。

第一回でお話しした「バラバラでいっしょ」を掲げていた東本願寺には、その後こんな言葉も掲げられていました。「いま、いのちがあなたを生きている」。自分が自分で生きているのではなく、命があなたという「器」で生きている——。これは、ガンディーが言っているのと同じ構造ではないでしょうか。

『教えて、お坊さん！「さとり」ってなんですか』（小出遥子 角川書店 二〇一六）の中で、大峯顯氏（浄土真宗本願寺派専立寺前住職・大阪大学名誉教授）は次のように述べています。

大峯 はい。ただ、私としては、「ほんとうのいのち」に出会った瞬間を、まあ、あえて言うのなら、「さとり」ということばでも表現できるのではないのかな、と考えているのですが。（略）
小出 「さとり」は、特別な境地でもなんでもない。ただ、「ほんとうのことば」、つまり「ほんとうのいのち」に従って生きることなんだ、と。

敗戦後、昭和三〇年代の創価学会の「大生命」、昭和四〇年代の紀野氏の「いのち」、そして現代の例えばティク・ナト・ハン師の「いのち」は、時代背景が違います。

日蓮宗は「いのちに合掌」と言います。「生命（いのち）としての仏陀論」は考えたい問題です。

これまで述べてまいりました、「人間釈尊・人間日蓮」、「釈迦脱仏・日蓮本仏論」、「生命（いのち）としての仏陀

論)について、諸先生には、各々のお立場から、ご発表をいただきたく存じます。

〔法華経のめざすもの〕

平成二六年(二〇一四)一月、創価学会は会則中、教義条項を改正しました(「聖教新聞」二〇一四年一月八日)。平成三年、日蓮正宗が同会を破門して二三年後のこと。次のように改正した部分を説明する(同紙)。

会則の教義条項にいう「御本尊」とは創価学会が受持の対象として認定した御本尊であり、大謗法の地にある弘安二年の御本尊は受持の対象にはいたしません。

この教義条項改正をうけて、『創価学会を語る』(佐藤優・松岡幹夫 第三文明社 二〇一五)では、次のような発言があります。

佐藤 私は、あの解説を読んでハッとしました。日寛(大石寺二十六世法主)教学の見直しを宣言したくんだり、要するに「もう宗門と学会は基盤が違いますよ。これからは無関係の関係になりますよ」という宣言だと思っ、うん、です。

松岡 これまで日寛教学が、宗門と学会の議論の共通の土台になっていました。今回、その日寛教学のなかの時代的制約がある部分については再検討し、普遍的な部分についてはしっかり受け継いでいく……解説ではそういう宣言がなされているわけですね。(略)宗門はまさに、時代的制約がある部分に固執し続けてきた。それゆえに、現代の人々を救えない宗教になっているのです。

さて、五〇年前にキリスト教の立場から高木幹太氏は次のように発言していました。

日蓮が自己をその仏であると云ったという（略）「日蓮本仏論」をとなえることには宗教的・実存的な領域で人を納得させるに足る普遍性は無いと云うべきである。

現在の創価学会は「日蓮仏法が世界中に広まった今」（『創価学会を語る』、「教義解釈の見直し」（同）を通して、高木氏の言う「人を納得させるに足る普遍性」の問題に着目しています。

教義の普遍性をめぐっては、私たちも、法華経は何をめざしたのか、それをこの時代において再び考えていくことが必要なのではないか。そのために、まことに恐縮ですが、二〇世紀半ばに、アメリカ・サンフランシスコを中心に開教布教をされた積日法上人（一九一〇—一九九一）から、一九六八年、私がいただいた、創価学会の活動を背景に、そこに典型的にあらわれたわが国の宗派仏教の在り方を批判した書簡を掲載しています。それについても諸先生からご感想をいただき、今日、法華経をいかに伝えていくべきか、ご討議していただきたく存じます。

冒頭でも述べましたように二〇一〇年、サンフランシスコに近いヘイワードの国際開教布教センター（当時）で開所二十周年法要が厳修されました。その式衆入堂のとき、打ち鳴らされたうちわ太鼓は積日法上人のもので、それを見て、私は感動いたしました。

さて、テーマに「対論の教化学」とあります。この「対論」ということばは、『開目抄』に、

後漢已後に釈教わたりて対論の後、釈教やうやく流布する（定遺五四〇頁）

とあります。

七二年前の昭和二〇年の敗戦、そして米軍による占領。昭和三〇年代に入っても、アメリカ兵によって、この東京の近郊でもたわむれに日本人が射殺されるという事件さえ日常的に起こっていました。しかし、今から振り返りますと、国内には奔放な自由の空気が横溢し、その中では東西のさまざまな文化や思想・宗教が交錯していたのです。これを「対論」と捉えれば、戦後の日蓮宗は様々な対論によって豊かな歴史的経験をしたと評しえます。そして、この対論の中で生まれたものが、本日五〇回を迎えた中央教化研究会議です。

本日は、そのいくつかを諸先生によって論じ、討議していただき、私もはその成果を現在に生かし、さらに未来に伝えたいものと、私は念願し、基調報告を終わります。

(引用資料中の傍線は基調報告の中で読み上げたことを示す)

〔資料〕

積日法上人(一九一〇～一九九一) 書簡

冠省 真面目なお信書有難く拝讀致しました。功利主義の風潮が世界中を浸蝕して、幸福を物質の中のみ求める時に貴君の様な真面目に物を考える方が、母校の然も宗学科の中に居られる事は心強い限りです。然も宗学と言ふ限られた世界に在り乍ら眼を海外まで向けられて、我々邊境に在る者の上にもまで激励の言葉を下さる事は全く考へても居なかつた事です。宗学者として最も^{けつじよ}闕如して居る時代感覚が若い宗学生の中に躍如として居る事を知って甚だ愉快です。我々の様に常に異民族の中に在って、國際的視野に立つて正法を普及する者は、常に自分の反省を強いられますので、宗学と言ふものの歴史的・地域的の價值感と言ふ様なものを特に持っています。例へばマグロの刺身は日本人

には御馳走であつても一般の西洋人には食欲の対象とならないようなものです。日蓮宗学も現在のままで西洋諸国に弘まると考へるのは余りに虫がよすぎます。

歴史的に見ても、現在の日本の宗派佛教は、印度にも支那にもなく日本獨特なものであることは既にお分りのことと思います。日本人の島國根性と宗派とは何か深い関係があるようです。問題は理屈の問題ではありません。理屈や教義は何とでもこぢ付けられるものです。真言宗でも、浄土宗、眞宗、禪宗でも、宗是・宗綱は後人が組み立てた物で、特に日本人はその別頭なる組み立てが上手です。これは茶の湯でも活花でも皆同様ですが、一度誰かが最もらしく理屈をつけたり形式を作ると、宗家と言ひ、家元と言ひ、特別有難い物の様に思ひ、門人が續いてゆく、そして宗派・流派を作つて勢力を争ふ。宗教の分野でも宗派はこうして生れたのです。支那の黄檗が弟子の臨済に向つて、「師と同じうするは師を辱める者なり」と言つたとか、先生の後塵を拝して居るようでは、まだ自在神力は得られませぬ。御承知の様に日本の宗派佛教は、支那より日本に及ぼした教相判釈の上に立つて居ますが、この判釈と言ふ演繹思想が、佛教を分断したのではないでせうか。兎に角、アメリカと言ふ新世界では佛教は再び統一の傾向を辿ることとは確かです。坐禪の組み方も知らない佛教僧侶でも困るし、縁起思想を知らない僧侶でも困ります。増して、般若の空思想を知らないでは話になりません。法華一乘思想は西洋の二元論に対する回答であり、般若思想は実在論の否定であり、縁起の諸論は自己中心主義を破壊するに効能があります。昔から西洋には三悪思想と言ふものがあつて精神文明では遙かに東洋に遅れています。その三悪と言ふのは

- (一) 自己中心主義 Egoism
- (二) 実在論的世界観 Realism
- (三) 二元論的世界観 Dualism

これに対して佛教では、無我思想と、実相論と、一乘思想を以て教導して行く訳です。

最後に自己紹介になりますが、私は最早やサクラメントの日蓮宗教會には居りません、と申すより、最早や日系人の社会から完全に離脱して、白人布教に専念して居ります。これから将来も、つつと……。

現在、サンノゼ市のユニテリアン教會に於て、白人相手の佛教講習会を開催して居ます。各地に同時に開催する心算ですがまだ始めた許りです。現在、三十人程熱心に聴講して居ます。毎週一回二時間、十週間で終ります。特に禪に対する要望が多いので時間を費します。

第一講 佛教の歴史と五時八教

第二講 存在とは何か（有と無、實在論と実相論）

第三講 般若の智慧（空の哲学、二元論の否定、理論と直感）

第四講 禪と公案（禪宗の歴史、曹洞禪と臨濟禪、修証一如）

第五講 禪と公案（無明の破壊、眞智と觀照、公案とは）

第六講 禪と公案（坐禪の実習、喝と棒）

第七講 大乘思想と一乗思想（眞言宗、浄土宗、眞宗、日蓮宗の概説）

第八講 一乗思想の世界観（一即多、多即一、一佛國土と開顯思想）

第九講 一乗思想と人間生活（諸法実相と一念三千、唱題成佛）

第十講 質疑應答

立正の先生では坂本幸男先生が一番親近感があります。執行先生も学生の頃お目に懸りましたが、先方では御存知ないと思います。戸田先生、鈴木先生など疎遠して居ますので、思い出して頂けないでせう。最近、勝呂信静先生の本を讀ませて頂きましたが、視野が廣く宗門人としては将来ある先生と思いました。

どうぞ、外界の軽薄な悪思想に捕はれず然も廣い見地に立つて宗学を發展させて下さい。寛容と叡智とを以て如何

なる邪見に対しても、太陽が霜を解かすやうに行き度いものです。戦斗的な正義など一時代の産物に過ぎません。一地方色に過ぎません。善いことでも、それに執はれると最早や善いとは言はれなくなりす。宗学者の欠点は宗学に執はれることです。正邪二元の立場から超出できないことです。一乗は相対の一乗で絶体の一乗でないのです。人間の見た一乗観で、諸佛の境地に立った一乗でないのです、どこまでも比較と判釈が付いて廻ります。ではこの位で、御健闘を祈ります。

一九六八年六月一八日

棄港にて

积日法

三原正資様

（現代宗教研究別冊『アメリカ仏教』を考える』五四頁）